

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年 9月 4日

派遣者氏名（専門分野）	山本 健二	（	フランス文学	）
-------------	-------	---	--------	---

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	19世紀フランス詩人アルチュール・ランボーと同時代の科学
-------	------------------------------

派遣期間

2011年 8月 20日 ~ 2011年 9月 3日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	フランス	パリ	フランス国立図書館	
	フランス	レンヌ	レンヌ第2大学	スティーヴ・マーフィー教授

派遣先で実施した研究内容

19世紀フランス詩人アルチュール・ランボーは、文学史においてシャルル・ボードレールを始祖とする現代詩の流れに位置づけることができ、彼の詩作品は20世紀の詩人だけでなく現代詩人にまで影響を与えている。彼の詩作品内に描かれるイメージが19世紀において、どれほど斬新であったのかを明らかにすることが本研究の中心テーマである。ランボー研究者も認めるところではあるが、彼の詩編には頻繁に解剖学用語、病名といった科学的な専門用語が多用されていることから、本派遣では、「ランボーと同時代の科学」と研究テーマを絞り、国立図書館で資料調査を、そしてレンヌ第2大学のスティーヴ・マーフィー教授と面談した。

一次資料調査は主にフランス国立図書館のミッテラン館で行った。まず19世紀の「科学の通俗化」がどのような過程を経てなされていったのか、その社会状況を知るために『La science pour tous : sur la vulgarisation scientifique en France de 1850 à 1914』を参照した。この文献では科学がどのように一般大衆にとって身近なものになっていたのかというだけでなく、文学作品において科学のテーマがどのように取り入れられていったのかを説明している。またこの研究書は19世紀に出版された科学雑誌の表紙絵について言及しており、その表紙絵の特徴がランボーの詩作品に表現されているのではないかと派遣者は考えている。

さらにミッテラン館ではランボーだけでなく19世紀の作家や詩人たちも読んでいたとされる、科学雑誌『Magasin pittoresque』を調査した。この科学雑誌は挿絵付きで、最先端の科学が紹介されている。この雑誌は冊数が多いため、ランボーが詩作を行っていた1869年から1875年までに刊行された分に焦点を絞り調査した。

また、ランボーの詩編に現れる科学的な語の使用が同時代の詩人たちと比べてどのような特殊性を孕んでいるのかを考察した。一つ一つの詩人の作品を考察するのではあまりにも膨大な量になってしまうため、『La science en poésie』を参照した。この本には科学のテーマが詩にどのように現れているのかを古代から近代に至るまでの詩を取り上げ、概説的に説明している。この本では19世紀の詩人としてユゴーやボードレール、ロートレアモン伯爵らが取り上

げられているのであるが、科学のテーマが当時の詩人たちに取って大きな関心事であったことが分かる。今後はランボオの詩作品と同時代の詩人たちの作品とを比較、分析して行く。

国立図書館でのリサーチとは別に、レンヌ第2大学のランボー研究者として有名なスティーヴ・マーフィー教授と面談した。同氏の研究論文は、ランボーと19世紀の社会、とりわけ詩人と同時代の政治（ナポレオン3世による第二帝政、パリ・コミュン、第三共和制）に関するものであり、派遣者の研究テーマである詩人と科学との関係を研究する上での指導を仰いだ。同氏との面談において、同時代の詩人と比較する上で進歩主義を称揚していたマキシム・デュ・カンの『現代の歌』や、高等派詩人フランソワ・コペの『現代の詩』を参照してはどうかという意見をいただいた。実際にランボオの韻文詩「花について詩人について語られたこと」ではデュ・カンの詩に描かれるような産業の発展を称揚しているイメージが描かれている。

個人リサーチとは別に、パリ第4大学の博士課程に登録している、ランボーを専門にしている学生数名に会い、最新のランボー研究の情報交換をした。また今後開かれる「ランボー友の会 (amis de Rimbaud)」に出席する予定である。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回のリサーチでは主に科学のテーマに焦点を絞り、ランボオの詩編に含まれるイメージを明らかにすることが当初の目的であった。派遣者は収集した資料全てをまだ読み終えていないが、19世紀の時代背景と他の詩人たちの比較を通してランボオの詩編内に描き出されたイメージの斬新さについて考察したいと思う。

またスティーヴ・マーフィー教授との面談を通して、ランボオの「現代性」という新たなテーマが見つげ出された。アンリ・メシヨニックが、ランボオの詩編に見られる « moderne » という語の否定的使用について言及しているように、ランボオの散文詩集『地獄の一季節』の「言葉の錬金術」の一節では « je [...] trouvais dérisoires les célébrité [...] de la poésie moderne » 「現代詩の大家など取るに足らぬものだと思っていた。」と、詩人の現代詩に対する軽蔑的な態度が伺える。マーフィー教授によるとランボオが詩を書いた時代において、ボードレールが現代詩人であるという認識はまだなされておらず、むしろ先に挙げたマキシム・デュ・カンやフランソワ・コペらが現代的な詩人とみなされていたことを指摘している。そのため今後の研究課題として、ランボオが先に挙げた二人の詩人をどのようにみなし、「現代」という語をどのように捉えていたのかを考える必要があるように思われる。また同氏からは、散文詩集『イルリュミナシオン』の「街」では « urbanisme » 「都市計画」や « futuriste » をテーマにしたような同時代性をテーマにした詩編も取り上げてみてはどうかと提案された。

このように近年のランボオ研究では「現代性」や「同時代性」が頻繁に取り上げられているものの、研究の可能性は大いに残っており、決して十分な考察がなされているとは言えないため、今後の研究では「科学」というテーマとともに、ランボオと19世紀の社会を視野に入れながら博士論文の完成を目指したいと思う。

派遣後の研究発表の予定

本研究で取り上げたテーマをさらに大きく発展させ、2012年度日本フランス語フランス文学会秋季大会で発表する予定である。